

# テーマ「北方八幡宮」

ジャンル：歴史的史跡

## 主祭神

品陀和気命（応神天皇）  
足仲津彦命（仲哀天皇）  
気長足姫命（神功皇后）

## 配祀神

田心姫命  
湍津姫命  
市杵島姫命



相撲の土俵



北方八幡宮の鳥居

## 歴史概略

奈良時代の天平勝宝三年（751）、宇佐八幡宮の御分霊を勧請し、賀保庄（現在の佐山・阿知須・東岐波・西岐波）の鎮守として、古尾の地に祀ったのに始まるといわれる。

鎌倉時代の天福元年（1233）、大内氏15代多々良弘貞のとき、賀保庄を南北に分け、北は須川村長山に、南は吉沢に仮宮を建て、その後、建長七年（1255）、大内氏16代右田太郎弘家が、北は須田村に、南は山村に移し同様な社殿を建立し、北方八幡宮・南方八幡宮として分祀された。

室町時代の応永十五年（1408）、社殿が焼失したため、大内氏21代左京太夫盛見は、公文・領家・地頭に命じて同十七年（1410）より再建に着手し、同年中に楼門を除いて総ての社殿の竣工をみた。残る楼門については、弘治三年（1557）以来地区民が毛利氏の臣市川経好に対して行った嘆願が実り、元龜二年（1571）に至って漸く竣工したのである。

江戸時代の慶長十年（1605）頃になると社殿は大破し、祭礼当日には社僧人等は路地において神事を執行するほどになった。このころ連年不作続きで、その上疫病が流行したので氏子中は大いにこのことを恐れた。そこで一同は再建費用の勧進をするとともに幕府からも援助を受けて、同十三年（1608）に本殿の上葺、拝殿の造営を終えた。ついで、寛永七年（1630）に舞殿を、同十四年（1637）に本殿を再建した。ただし、本殿については、元文六年（1741）、再び改築をした。

明治六年（1873）郷社に列せられた。同二十一年（1888）、境内地を四段に区切り、石垣をもって整備するとともに、社殿の後方を切り開いて南北に馬場を作った。さらに同四十年（1907）には境内外に環状の競馬場を設け、大正十一年（1922）には、これをさらに拡張・整備した。

北方八幡宮のHP参照



秋に開催される相撲大会